USER'S VOICE
03

設計・施工
有限会社
赤穂工務店

［三戸郡南部町］平成17年2月竣工

建てるなら“広々とした家”

奥様　「県産材の家」を建てると娘に話したら、娘は初め、昭和の時代の、板を横に張ったような古い家をイメージしたようです。輸入住宅といえば、外壁にレンガを張ったような豪華な建物をイメージしますが、「県産材の家」というと、どこか古めかしい印象があるのかもしれませんね。

わたしも主人も、「三八地域県産材で家を建てる会」主催のバスツアーに参加して、赤穂工務店さんがお建てになった新築の家を見学していましたから、使う木材が県産材というだけで、建物自体はいま風のしゃれたつくりであることは知っていましたけれど、見ていない娘は、昔の家のイメージしか抱けなかったのでしょう。でも、いざ家が完成して、嫁いでいる娘が孫を連れて遊びにきたら、イメージとはまったく違う家が建っていたので、へえー、ってびっくりしていました。

リビングが吹き抜けで、しかも建具を開け放した和室までワンフロアーで広々とつながっているから、孫たちには体育館のようなもので、遊びにくるたびに走り回っていますよ。吹き抜けの部分に木がいっぱい見えるので、山にでもきている感じなんでしょうね、丸太の大黒柱にのぼったり、二階の窓から顔を出して「やっほー」と叫んだりね。

主人が公務員で転勤が多く、長いこと官舎暮らしをしていました。官舎の部屋って、壁で区切っただけの味気ないつくりでしたから、その反動で、建てるなら広々とした家がほしいと、その頃から無意識に願っていたように思います。

30代の頃には、洋風住宅に憧れて、住宅雑誌を買い込んだり、ハウスメーカーの見学会があるたびに訪れたりしていた時期がありましたけど、花とか日本庭園とかの趣味を始めた50代を境に、家も和風住宅に惹かれるようになりましたね。

ご主人　結婚当初、ここの団地に1区画、土地を買っておいたんですよ。5年の月賦でした。5年の間に家を建てな

お孫さんたちも大喜びの吹き抜けのリビングルーム。

車庫から玄関へ通じるアプローチ。

ければならないという条件付きでしたから、平屋の家を建てましたが、いま家内が言ったように、転勤族で、官舎暮らしだったので、建てた家はそのままずっと身内に貸していました。

定年が近づいてきたときに、買っておいた土地の南側に接する1区画が売りに出されたんです。よし、ここに家を建てようと決心したのは、その土地を買ったときですね。それまでは、買った土地はあるものの、仙台に移住しようかとか、もっと暖かい南のほうへいこうかとか、気持ちは定まっていなかったんですが、南側の土地が売りに出されたときに、なんかこう「永住の地」を与えられたような気がしましてね、すぐに買ったんです。

奥様　ちょうどその頃、新聞広告でバス見学会があるのを知って、主人と二人で参加したんです。地元の山の木を使って住宅を建てている「家づくり会」というのがあることを知ったのもそのときでした。ツアーでは、会の会長さん（田中裕会長）がお持ちだという山を見せてもらい、それから会員の大工さんが建てた新築の家を見学させてもらいま

リビングから眺める庭は四季のうつろいが楽しめる。

した。

バスの中には、何人かの会員さんたちが乗っていましたが、頼むならこの人と、失礼ながらひそかに目星をつけていたのは“誠実そうな”赤穂さんでした。官舎に帰宅してから主人と話し合ってみたら、主人も同じ意見だったんです。ツアーで見学した、吹き抜けのある広々とした新築の家も、赤穂さんが手がけた現場でした。これでようやく官舎の狭い部屋から抜け出せると思ったものです。

アカマツ、スギ、ケヤキ

ご主人　家を建てるために山を見学したという体験は、初めてのことでした。それまで山は、眺めるだけの存在でしたからね。バスツアーのときに田中会長さんが、先祖から代々受け継いできた里山を案内してくれたんですが、整然と立ち並ぶスギ林が、実はちゃんと手入れしているからこそ、そのように美しく見えるのだということも知りました。間伐や枝打ちなどの手入れをしない山は荒れているのだそうですが、遠くから眺めるだけではそれは分かりませんからね。

スギ林の中に、天然のケヤキの木も生えていました。ケヤキの母樹（ぼじゅ）から落ちた種が根付いたものなのだそうです。そのケヤキ1本の値段が、1ヘクタール分のスギに相当するということ。それだけスギの価格が安いということ。採算が合わないから山持ちは手入れせずに放置しているのが現状だということも、初めて知りました。

里山の端のところに、見上げるほどに高い大樹が立っていました。幹が途中から二つに分かれて、梢の枝が空を支えているように見えました。樹高30メートル、樹齢は200年以上経っているアカ

建具を開け放すとリビングまで広々とした空間が広がる。

マツで、里山のシンボルなのだそうです。へえー、と思わず声が出て、幹に触れてみましたが、２００年以上も育ってきた生命力といいますかね、どっしりとした感触が伝わってきて、いまもまだそのときの感覚が手のひらに残っていますよ。

そのシンボルのアカマツではありませんが、我が家のリビングの床に、赤穂さんが、アカマツの木を使ってくれました。玄関ホールの床にはケヤキ、リビングの一部の内壁にはクリ、和室の縁側や寝室の床にはスギ。みんな田中会長さんの里山から伐り出した木です。

たまに孫を連れて帰ってくる子供たちが、「空気が澄んでる」と室内を見回しながら同じ感想をもらすのは、アカマツやスギやケヤキが、里山に生えていたときと同じ空気をつくり出しているからでしょうね。

奥様　リビングに立っている大黒柱のスギの丸太を山から伐り出すときには、赤穂さんや会長さんが見守る中で、製材所の方がお神酒を上げてくれましてね、あのときに感じた厳粛な思いは新鮮でしたね。チェンソーで伐ったスギがだんだん傾いていって、林の地面に倒れ込んだときのあの地響き。そのスギの丸太が、いまこうして自宅のリビングに立ってるんです。山と家が結びついているからこそ、木に見守られているような安心感があるんじゃないでしょうかね、きっと。

プランの打ち合わせをして

縦横に張り巡らされた表わしの梁（上）と、
それを支えるスギの大黒柱（下）。
いずれも施主が見守る中、森の原木から伐り
出されたものだ。

いて、もう何回も何回も描き直していただきましたが、パースっていうんでしょうか、いくら立体的に見える図面でも、平面に描いたものですから実感がよく伝わってこなくてあれこれ思い悩んだものです。でも、使う木だけは、実際に山で見学させていただきましたから、アカマツといえば、いま主人が話した200年以上という会長さんの山の見事なアカマツの姿が思い浮かんで、安心感を覚えたものです。

母屋のイメージに合わせて純和風に建てられた車庫。

ご主人　ここの土地に平屋の家が建っていましたから、それをまず解体して、最初、平屋の家の荷物を移す小屋を建てたんです。小屋なのに、母屋の和風のイメージに合わせて赤穂さんが茶室のようなしゃれた小屋を建ててくれました。それと、母屋を建てた後に、家までの入り口を兼ねた車庫を建てたのですが、これも純和風の車庫にしてくれました。南側の1区画が手に入って敷地に余裕ができたからこそ、庭園を眺めながら通って母屋に入るという楽しみが実現したんです。

奥様　和室の縁側に水屋があるんですが、そこから、玄関横の丸くくり貫いた壁越しに庭が眺めるのが好きですね。秋になれば真っ赤に紅葉したドウダンツツジが見えますし、季節ごとに、生きている絵のように風景が変わるんです。それと、リビングの椅子から、吹き抜けを通して、2階の寝室の窓が見えるんですが、その窓越しに、明かりの点いた紙の丸い照明器具が、満月のように見えるんです。わたしのお気に入りなんですよ。

丸くくり貫いた壁越しに眺める庭は奥様のお気に入り。

奥様お気に入りの満月に見える2階の照明器具。